

〈50周年記念講演会〉

ゲバラ思想は生きている？

～ 21世紀のラテンアメリカから～

後藤政子

予測された死

エルネスト・チェ・ゲバラは1967年10月8日、ラテンアメリカ革命を目指してボリビア山中でゲリラ戦を準備中に政府軍に捕えられ、銃殺された。

世界の多くの人々も、妻のアレイダも、また「ゲバラであればこそ」と彼について行った戦士たちも、たとえわずかであれ、生きて帰れる可能性を信じていたが、今から振り返れば、これは「予測された死」であった。ゲバラ自身もほぼ100%の死を覚悟してキューバを出立していた。

熱烈なゲバラ主義者であり、ボリビア・ゲリラにも同行したフランスの哲学者レジス・ドブレが一転して激しい批判者となったように、ゲバラの死後、ゲバラに冷たい視線を向け始めた人々は少なくない。その一方では、今もなお、ゲバラを知らない若い世代も含め、「閣僚の地位も、愛する家族も捨て、虐げられた人々のために命を捧げた」ゲバラ人気は根強い。

20世紀に生まれたゲバラの思想は、21世紀の今日において、もはや時代遅れとなったのか。あるいは、いまだに生きているのか。ラテンアメリカ社会の変動と絡めながら考えてみたい。

イメージが人物像をつくる

他の分野でも同じかもしれないが、ゲバラや、カストロや、キューバについて、しばしば、いわゆる「常識」や、知人や関係者と言われる人々の証言や、あるいは個人的な好みやイデオロギーにもとづく推測などが、立証されることなく前提として取り上げられ、議論が行われている。親キューバ派、反キューバ派を問わず見られる傾向であ

る。

他方、イメージが人物像をつくり上げることもある。報道カメラマンのゴルダの手になる、未来を見つめる精悍なゲバラ像は世界中にあふれ、ティーシャツやコーヒーカップにまでなった。革命直後、まだゲバラが表舞台にあまり出ていなかった頃、たまたま演説会場の壇上の背後から歩み出てきて集まった民衆を覗き込む姿を偶然に捉えたものである。

ルーブル美術館のモナリザの前で感涙にむせぶゲバラや、確実に死が待ち受けていることを知りつつ、「ゲバラがゲバラであるために」あえて自らを叱咤激励し、ラテンアメリカ革命のために旅立った苦悩するゲバラは、この写真に入り込む余地はない。もしもゴルダがシャッターチャンス逃していたならば…？ また、この写真の著作権を放棄していなかったならば…？

NHKの番組だったろうか。「カストロとの二人三脚で革命を実現したゲバラ」という解説があった。キューバ革命に関する本とさえ、ゲバラの関係書が圧倒的多数を占める日本ならではの現象であろう。今もなお、「特別な人」としてゲバラを深く敬愛するキューバの人々は、このような理解に対して表立って異議を申し立てることはないであろうが、その脳裏には独裁政権によって虐殺され、あるいは革命闘争の過程で命を落とした数多くの優れた、勇敢な指導者の姿が次々とよぎることであろう。

大義への献身、自己犠牲、モラルの高さ…。これは「ゲバラ精神」といわれている。しかし、実はゲバラのものではなく、キューバのものである。第二次独立戦争（1895 - 98年）の指導者であり、「キューバ独立の父」と言われるホセ・マルティに体现され、「キューバ精神」として脈々と受け継がれてきたもので、フィデル・カストロ

もその継承者の一人だ。ゲバラはもともと性格的に似たものをもっていただけだが、カストロやキューバ革命との出会いを通じて「自らの思想」としたのである。このようにゲバラに関する誤解はたくさんある。

ゲバラ理論はキューバのもの？

キューバ革命は、当然のことながら、キューバ固有の条件のもとで実現した。キューバの中学校の歴史の教科書では、キューバ革命は、植民地時代以来のさまざまな運動、さまざまな人々の闘いの経験の蓄積が20世紀半ばによくカストロの指導のもとで実を結んだものとして描かれている。

ところが、米国の事実上の植民地と言われたカリブ海のこの小国で革命が成功し、しかも米国の武力侵攻にも耐えて革命権力が維持されたことは、あらゆる社会変革の試みが米国の介入で挫折してきたラテンアメリカ諸国に大変大きなインパクトを与えた。そこから、「キューバ革命の経験を理論化したラテンアメリカ革命論」が成立し、各地で「キューバ型ゲリラ」が発展した。そのバイブルとなったのがゲバラの『ゲリラ戦争』と、レジス・ドブレがゲバラからの聞き書きをもとに執筆したという『革命の中の革命』である。いわく、「ラテンアメリカの革命は農村に基盤を置くゲリラ戦略によって可能である」、「ラテンアメリカの自立と発展は社会主義革命において実現できる」、「必ずしも革命の客観的条件が熟すのを待つ必要はない。それはゲリラの『核』によってつくられる」…。

確かに、カストロはボリビアのゲバラに対する支援を惜しまなかった。だが、このラテンアメリカ革命論について、実際にはどのように考えていたのであろう。

カストロは武装闘争主義者とみなされている。しかし、キューバ革命でゲリラ戦略をとったのはあらゆる平和的手段の可能性が閉ざされたと判断したからである。彼は、シエラ・マエストラのゲリラ戦のさなかですら、あらゆる反独裁勢力、あらゆる運動と連携しながら闘いを進めていた。す

べての勢力を結集しなければバティスタ独裁政権を倒すことはできないと考えたためである。しかし、その一方で、革命を単なる政権交代に終わらせることなく社会変革につなげるためには、最低限、何を担保すべきか。これを念頭に、カストロは慎重に戦略や戦術を練り、時には妥協し、時には原則を貫いた。彼にとっては「平和路線か、武装闘争路線か」といった風の単純な問題ではなかったのである。

ゲバラが初めてキューバの大地を踏んだのはグランマ号で上陸したときであった。彼が眼にしたのはゲリラの根拠地シエラ・マエストラから見えるキューバであり、1965年に出立するまですごした革命成功に高揚するキューバであった。「キューバ革命の経験を理論化する」に際して、キューバの長い独立運動の歴史の重みや固有の条件が見過ごされたのも不思議ではない。

とはいえ、ボリビア・ゲリラの失敗の原因については、様々な要因を分析する必要がある。ゲバラが入ったサンタ・クルスのニャンカウアスはほとんど人の住まない地域であり、1952年のボリビア革命の担い手である鉱山労働者の居住地とは遠く離れていたこと、ソ連派のボリビア共産党が平和路線を譲らず支援を渋ったこと等々。

決定的だったのは、キューバ革命後、米国の反乱抑止能力が大幅に向上したことだ。「第2、第3のキューバ」を阻止するため米軍の装備や情報収集能力は強化され、ラテンアメリカの軍部も格段に近代化された。米国で教育を受けた将軍たちが軍のトップを握ると、各国の軍部は連携し合い、反政府ゲリラや反体制派のせん滅を図った。これに対抗して、ゲバラは「第2、第3、第4の、そして多くのベトナムを…」と訴え、米国の力を分散させようとしたが、超大国の総力戦を前にしては、武器も貧弱な、50人にも満たないゲリラはひとたまりもない。

「ラテンアメリカの時代」の影で

軍部の力が強まるとともに、1970年代には南米では右も左も親米軍事政権という「軍事支配の時代」となった。これは新自由主義時代への転換

期でもあった。将軍たちは反乱抑止技術だけではなく、米国の経済発展理論も身に付けて帰国していたのである。1980年代半ばには軍事政権は次々と崩壊し、「民主化の時代」を迎えるが、新自由主義化の波はとどまらなかった。

よく知られているように、1980年代は「失われた10年」と言われている。それは1990年代前半の「失われた5年」まで続き、経済成長率は低迷し、所得格差は拡大し、極貧層や貧困層が膨張し、失業者があふれた。これは「死の時代」とも名づけられている。

ところが、21世紀に入るとラテンアメリカ諸国の経済は一転して好調に推移し、伝統的な食料・原料・エネルギーの生産や輸出だけではなく、高度な工業も発展した。そればかりか、貧困層や極貧層が減少するなど社会指標も改善している。「ラテンアメリカの時代」の到来である。もはや、貧しい人々の解放というゲバラの夢は「20世紀の遅れた思想」となったかのようだ。

けれども、失業率は依然として高く、最上位10%が全体の半分の所得を独占し、残りの半分の90%が分け合うという状況に変わりはない。そのような国において一般国民の生活はいかばかりのものか。ワーキング・プアなど貧困ラインすれすれのボーダーライン層が増えただけではないか。

他方、貧困層の代名詞であった先住民のなかにもビジネスで財を成し、瀟洒な御殿を建てる人もいる。しかし、圧倒的多数の先住民はいまだに底辺であえいでいる。管理職として男性と同等に活躍する解放されたエリート女性が増えているのは日本の女性にとって羨ましい限りだ。だがその傍らで、膨大な数の女性が低賃金の日雇い労働者として3K労働をこなし、一家の生活を支えている。就学率が向上したとはいえ、ほとんどが小卒止まりであり、教育の格差と貧困の連鎖が起きている。セイフティネットも消滅し、「一度落ちたら這い上がれない」…。

これはどこかで見た風景である。新興国として国際的に注目されているインドや中国だけではなく、日本でも同様の事態が懸念されている。つまり、かつて「南」の諸国に集中していた矛盾が、今では「北」の諸国にも波及しているというこ

と、「北」と「南」が融合し、「北」の内部にも、「南」の内部にも、「北」と「南」が併存しているということ。グローバル化とはそういうことであろう。

「革命戦士ゲバラ」を超えて

ゲバラは1965年に、米国だけではなく、旧ソ連を含む「北」の諸国による「南」の諸国の収奪を批判し、その直後に「南」の貧しい人々の解放の旅に出立した。当時の彼には、今日のようなラテンアメリカや世界の変化は予想できなかったであろう。

しかし、ゲバラはキューバを出る直前まで、平等主義社会の建設にいそしんでいた。それは新自由主義の経済成長至上主義、競争原理優先、個人責任、金権主義等々とは異なる原理に根差すものである。もっとも、この平等主義も、「ゲバラのもの」ではなく、「キューバ精神」にもとづくものであることは言うまでもない。

そのキューバも、「平等主義社会は実現不可能だった」として、今では「公正な社会」の実現を目指して七転八倒している。21世紀にふさわしい「人間らしい社会」とはどのような体制のもとで実現できるのか。それを知るためにも、「ゲリラ戦士ゲバラ」を超えたゲバラについて考えてみる必要があるようだ。